

児童の言語生態合同調査・研究報告

音声言語教育の方法的研究(2)

一分間スピーチにあらわれた

話型の発達

小泉節子

1. 目的

子どもの話を聞いていると、大人のように自然にすら話せない。つい構えてしまう。幼い子が何かを伝達に
来る場合、肩に力が入り、思うことの
半分も言えず、その内容を伝えきれない
とき、大粒の涙を落していることが
よくある。これは、子どもが人に話を
するとき、どの意識（構えをとって）
で話をしたらよいのか、まだつかめ
ないからだろう。しかし、成長とともに、
子どもたちは、徐々に人前でも堂々と

話ができるようになる。これは単に話
すことに慣れていく。ということでは
なく、その子自身が話す意識をどこか
で習得してきているからだと思う。こ
の習得過程に発達があるように思える。
電車に乗っていて、見ず知らずの子ど
もでも、その子の年齢がだいたい見当
がつくのは、これはその子のしぐさ
も関係があるが、話しぶりや話し方に、
その学年をききつけているのだと思う。
今回の一分間スピーチは、子どもた
ちの話をするときの意識集中がどのあ

たりにとまっているのかもっと平たく
いうと、言いたいことを、柔軟に言え
なくしてしまっている意識のこだわり
について、その年令的段階や過程を見
届けるために調査を試みてみた。

2. 方法

一分間前後、自分の話したいことを、
クラスの全生徒の前で話す。（事前に
話したいことは考えてきて良いが、メ
モは見ないで話す）

3. 調査対象

四年生 東京・八王子市立横山小学校 30名
五年生 東京・町田市立成瀬台小学校 30名
六年生 東京・町田市立南第四小学校 30名
へ各校とも、男子15名・女子15名を調
査の対象とした。

4. 調査期間

昭和五十四年五月～七月（全員テ
レコーダーに吹き込んだものを、再
生しながら、調査結果をまとめた）

4 年生

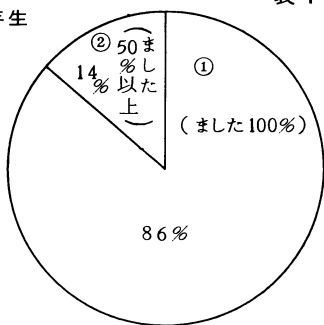
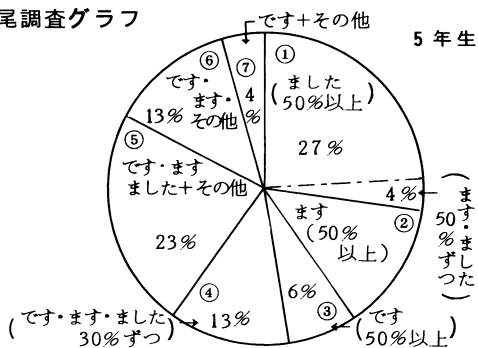


表 1 A 学年別 語尾調査グラフ

5 年生



6 年生

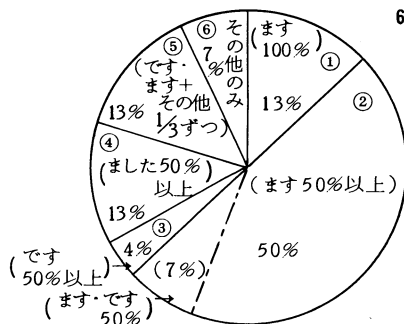


表 1 B 語尾調査内わけ使われ方の種類別グラフ

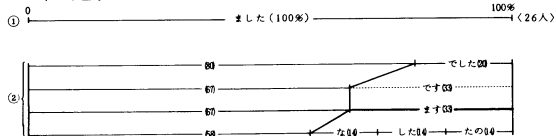
①～⑦までの番号は表 1 A の円グラフの内わけという意味

—— ました
—— ます
----- です

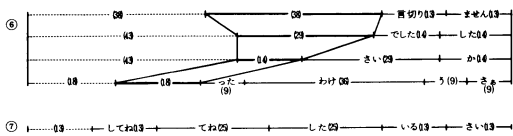
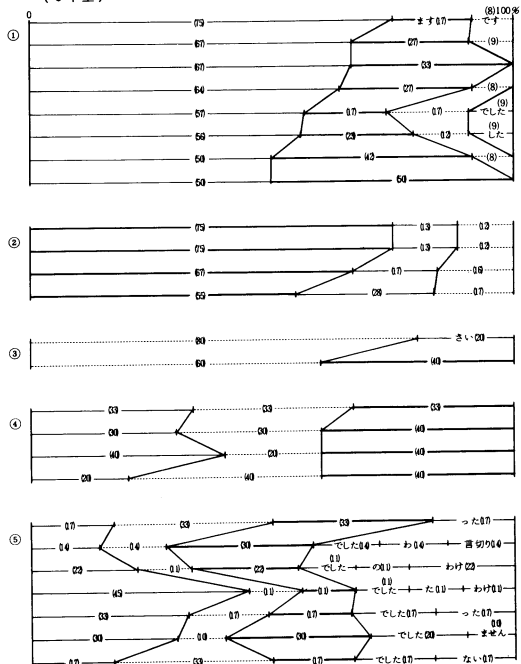
() 内%

< > 内は、そのグラフと同じ語尾使いをした子どもの人数
書いていない場合は 1 名

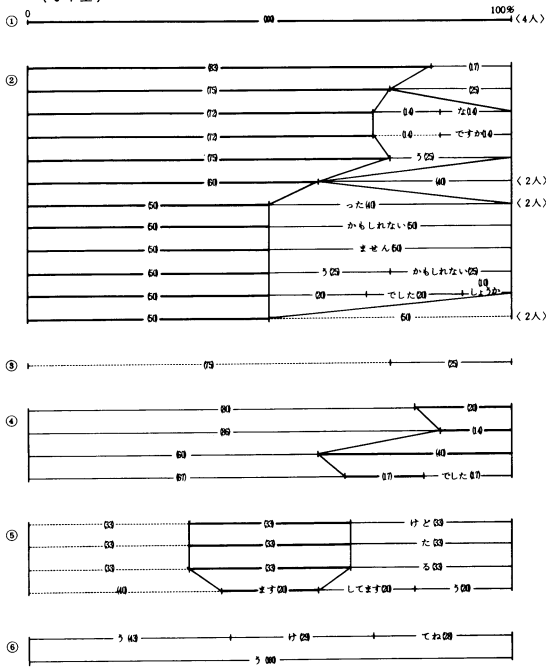
(4 年生)



(5 年生)



(6 年生)



注) グラフの集計結果が 100% を前後するのは、四捨五入したためである。

1. 語尾調査

話しぶりを見るのに一番適切なものは、その話の終りの部分をどういふことばで結んでいるかである。そこで、子どもたち一人ずつについて、スピーチ内のひとつのセンテンスごとの語尾を調査してみた。子どもたちそれぞれが、どんな割合で、語尾を使っているかを調べ、その割合が似かよったもの同志(たとえば50%以上)を使ったを使っている)を集めそれが、その学年全体の何%をしめているかを、出した結果が、表1Aの円グラフである。また表1Aの内わけ(円グラフでは番号で示されている)を行ったのが、表1Bである。この結果から考えると、四年生は、ほとんどの子どもが、話をするとき、「……しました。」という形をとっていることが、わかる。これは、話しをするということは、あったことの報告をしなればならないと、どこかで思っているからではないかと考えるところが、五年生になると、その「ました」がぐっと減り、です・ます体が大変ふえてくる。そしていろいろな語尾を使い出し、四・五・六年を通じて、一人が平均して使う語尾の種類が一番多くなる。(12語へ4年)↓37語へ5年)↓16語へ6年)中でも一番多いのは、ました・です・ますを三語とも語

尾に使っている子どもが目立つ。もう少し細かく見ていくと、語が多い順がました↓ます↓ですと並ぶ。さらに、その他の語を見ていくと、その他の語がふえてくると「ました」の語が減ってくる傾向が見られる。(内わけ表1B 5年生⑤を参照)そして、内わけ⑥に至ると、「ました」が消え、完全にです・ます調へと変化していくのが、よくわかる。これは四年生の口を開くとすぐ報告型になるタイプと異なり、報告の内容を自分のことばで説明しようという話し方が、ふえてくるからではないか。そのひとつの特徴として、その他の話の中に、「でした」を使う子が多くなってきている。これも、「ました」という行動報告型から、こういうこと「でした」という、自分が介在した説明型ともいえる良い例の様に思える。

六年生になると、五年生で散らばっていた語尾が集まり、使い方が固定してくる。圧倒的に多いのが、「ます」で、半分以上の子どもたちが、「ます」を、必ず使っている。「ました」「です」はまだ使われているが、五年生のそれに比べると急激に減っている。「ます」が増えてきているということは、自分自身が主体となって、話をしはじめたからだ、と考えられる。六年生の語尾の特徴は次に、五年生と比べた語

について、もう少し述べたいと思う。

○その他の語(です・ます・ました以外の語)の語尾について

五年生の特徴語尾

1. ……下さい。

2. ……てね。……してね。

3. ……わけ。

4. ……か。

六年生の特徴語尾

1. ……かもしれない。

2. ……けど。

3. ……う。

4. ……る。

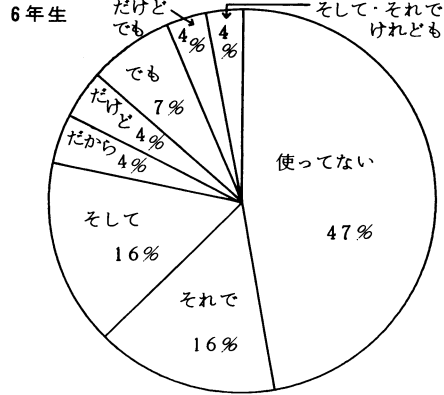
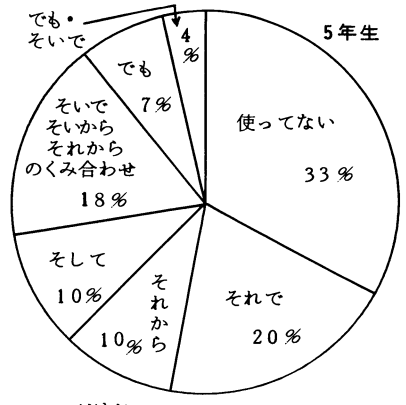
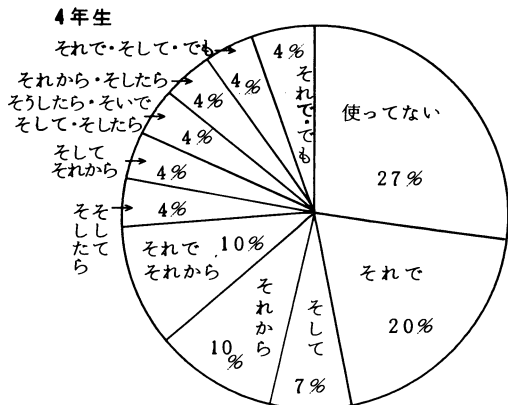
五年生の語と六年生の語を比べるとはつきりわかるが、六年生は、五年生の「念を押しながら、感情に訴えていく話し方に反して、自分の考えを、自問自答する形、あるいは、考えを述べる形、あるいは言い切る形と、ずいぶん理性的な面が見られるようになってきていると、いえるのではないだろうか。

2. 文と文をつなぐ接続詞

センテンスとセンテンスのつなぎの接続詞はどうだろうか。表2は、接続詞の使われ方のグラフである。四年↓五年↓六年と、その使われる割合が少なくなっている。これは、文の長さとの関連性が多分にある。四年生は、ほとんどのセンテンスが切れずに長く続き、

それを、「それで」で結び、次へと移っている。そこで、全体の割合からいうと、多く使われる結果となるのである。接続詞が、五年生から六年生へと、使われる回数が少なくなっていることは、話のセンテンスの長さだけでなく、話の内容の展開の仕方にも、及ぶように思う。接続詞で、だからと続けず、転換が良く、きびきびと話すようになるといえる。接続詞の中身だが、四年生は圧倒的に、「それで、それで」が多く、ほとんどが、時間の経過をとらえる順接ばかりである。わずかに「でも」が、顔を覗かせている程度である。五年生になると、でもが少量だが、ふえる。しかし、接続に関する内容的には、わずかに「すると」という言いまわしが五年生かなと、思えるぐらいで、四年生と、ほとんど、変わりが無い。だが、六年生になると、「だけど」「でも」「けれども」と、ことばのつなぎ方に、逆接的な要素が、色濃く入る。ことばを発しながら単に報告で終ってしまいう四年生との大きな開きであろう。さらに、この接続の仕方を、ことばのフレーズごとに追い、話している最中のことばとことばの接続へと、巾を広げて、考えて、いきたいと思う。そして、その各学年の、およその話型が、考えられればと思う。

表2 接続詞表



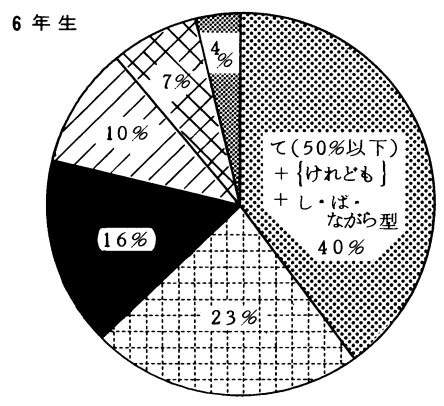
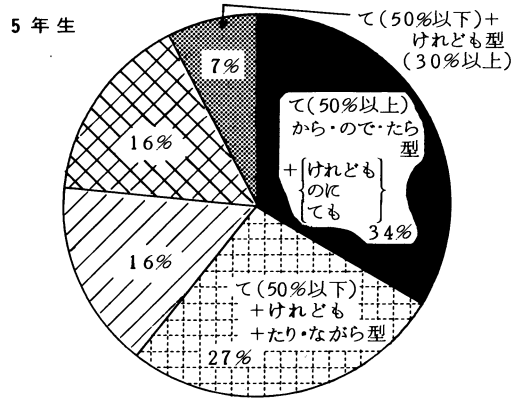
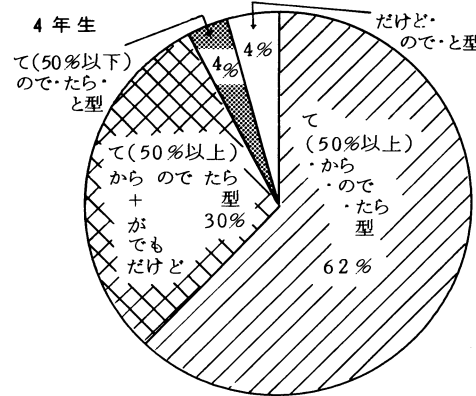
3. 接続助詞・接続詞の
使い方から、考えられる
各学年の話し型について

表3に、その接続助詞をまとめてみた。一番多い助詞は、「て」で、これは、どの学年も、多かった。でも、四年↓五年↓六年となるに従い、少くなる。これは、話を加算的にする傾向が、六年生になるにともない、少なくなるからであろう。

○四年生の話し型
てしてして
① のでしからして
この傾向が、62%と、大半をしめる。

表3 接続助詞・接続詞の使用から考えた話し型グラフ

実線 // // // 50%以上順接
××××× 50%以上逆接
■ 50%以上逆接(けれども)
点線 + + + + + 50%以下逆接(けれども)
■■■■■ 50%以下逆接(けれども30%以上)
××××× 50%以下逆接+し・ば・ながら



てしからしが

② ていのでいでも
たらいていだけど

○五年生の話型

① ていけどいけどい
いけれどもいけれども

しだけれどもしたりたり

②
 しけれども、しながらし、
 たり し ながら が極めてわ

しそんなんです。

しだそうです。
しというようなことです。

年生は、これから考えて、一般論と

も知れない。

○六年生の話題

① しだすとながらいかも……

1
も
1
も
1

②　よりけどよりだ。
　のかのか

一や一や

し
か
も
し
れ
な
い。
○

たしか／＼して／＼か。

なぜのか？と思います。
とか？とかは？と思う。
じゃないか。

大變、疑問型が多くなっている。

と同時に、「……と」という「と」が四年↓五年↓六年と増え、六年生は30%以上使っている子どもが全体の1/3近くにもなっている。これも、六年生のものを感じる思い方と関係があると思う。これらは単に自分に自信がなくてこう話すのではなくて、まず、自分自身が、何かを考えながら自分に問いつつ行うという構えを、発見したからではないだろうか。話をするということとは、思いをめぐらすことだと思ひ、それにもなることが、出はじめた学年であるといえよう。

いままでも種々な調査を本誌は試みて

(東京・成瀬台小・教諭)